

## 古代期トカラ語 B による韻文題記について\*

荻原裕敏

キーワード: 古代期トカラ語 B ブラーフミー文字 キジル石窟

### 要旨

本稿では、これまでトカラ語研究者に知られていなかった、古代期トカラ語 B による韻文題記を扱う。ここで扱われる題記は、新疆亀兹研究院・北京大学中国古代史研究中心・中国人民大学国学院西域歴史語言研究所による研究プロジェクトの一環として、筆者がクチャのキジル石窟第 211 窟・第 213 窟で解読を試みたものである。ただし、損傷が激しく、十分な解読を行うことができなかったため、主にドイツ探検隊が撮影した当該題記の写真に基づいた上で、現地調査での解読結果を併せて解釈を行うとともに、古代期トカラ語 B による韻文のコーパスを提供する。

### 1. クチャ地域の石窟寺院に見られる古代期トカラ語 B 題記について

クチャ地域の石窟寺院にトカラ語 B による題記が大量に書かれていたことは、Pinault (1987) によって初めて明らかにされた。そこで扱われたブラーフミー文字題記は、言語の特定が困難なものを除けば、全てトカラ語 B によるものであった<sup>1</sup>。これらの題記解読に利用されたのは、主として 20 世紀初頭にクチャ地域を訪れたフランス探検隊撮影の写真であった。2009 年以降、筆者はクチャ地域の石窟寺院を管理する新疆亀兹研究院と北京大学中国古代史研究中心・中国人民大学国学院西域歴史語言研究所による研究プロジェクトに参加し、クチャ地域の石窟寺院に残るブラーフミー文字題記の調査・研究に従事してきた。その結果、クチャ地域の石窟寺院には Pinault (1987) によって解読されたものの他に、大量の未公開の題記が存在することが明らかになった<sup>2</sup>。その成果は、新疆亀兹研究院・北京大学中国古代史研究中心・中国人民大学国学院西域歴史語言研究所の名義によって、既に調査簡報という形で複数の石窟について出版しており、現在最終報告書の出版に向けて、作業を行っている<sup>3</sup>。本稿では、これらの題記の内、これまでトカラ語研究者に知られてい

\* 本稿の内容は、新疆亀兹研究院・北京大学中国古代史研究中心・中国人民大学国学院西域歴史語言研究所の名義によって出版予定の最終報告書にも収録されることになっている。現地調査にあたっては、新疆亀兹研究院趙莉・台来提両副院長並びに同研究所のスタッフの方々にお世話になった。また、ベルリン・アジア美術館の Lilla Russell-Smith 博士には、ドイツ探検隊撮影の写真の利用をご許可頂いた。特に記して、これらの方々にお礼申し上げる。なお、題記の解釈に際しては、慶昭蓉博士より貴重なコメントを頂いた。ただし、本稿における記述の責任の一切は、筆者に帰する。

<sup>1</sup> 出版後、G-Su 41 という番号を与えられた題記は、Maue (2009) によって中世イラン語に属するトゥムシユク語によるものと判断された。この題記の最新の解釈については、Maue (2016: 120-128) を参照。

<sup>2</sup> Pinault (1987) で解読されたトカラ語 B の題記の大部分はクチャのスバシ石窟に由来するが、現地調査によって、その多くが現在は失われており、またその一部がドイツ探検隊によって引き剥がされ、ベルリンに齎されていたことが明らかになった。

<sup>3</sup> クチャ地域に現存するブラーフミー文字題記の全貌については、最終報告書で提示することになっているため、ここでは言及しない。なお、既刊の主要な成果については、栄 (2015) を参照。

かった古代期トカラ語 B による題記を扱う<sup>4</sup>。

古代期トカラ語 B によって書かれた題記の存在は、筆者が上記プロジェクトでの調査中に確認し、荻原 (2013) として初めて学界に報告した。これらの題記の殆どは、クチャ地域の石窟寺院の内、キジル石窟で発見された。この事実は、キジル石窟が古代期トカラ語 B の通用していた時代に、既にクチャの仏教徒から礼拝の対象となっていたことを示すものであり、キジル石窟も含めて、クチャ地域の石窟寺院の造営年代を検討する上で、重要な手がかりを提供するものである。また同時に、写本断片からのみ知られていた古代期トカラ語 B が紙写本以外にも実際に使用されていた事実を裏付ける一方、これらの題記が、Peyrot (2008) によって後期或いは口語のトカラ語 B と見做された言語特徴も僅かながら含んでいたことから、トカラ語 B の歴史的変化及び文章語成立についても検討の余地があることを示していた。さらに、荻原 (op.cit.: 383) で指摘したように、古代期トカラ語 B 題記の書写に使用されたブラーフミー文字の類型は、Malzahn (2007) で扱われた断片とは異なり、最も古い段階の特徴を示していないことから、ブラーフミー文字とトカラ語 B の古代期における相関関係についても、注意深く検討する必要性を認識させるものであった<sup>5</sup>。このように、古代期トカラ語 B 題記がトカラ語研究に対して貢献できる余地は大きく、本稿は前掲拙稿の続編として、新たな資料を学界に提供することを目的としている。

## 2. 資料の紹介

本稿で解釈を行うトカラ語 B 題記は、クチャのキジル石窟の「後山区」と称される地域に位置する第 211 窟及び第 213 窟に書かれているものである。これらの石窟は壁画などによって装飾された中心柱窟ではなく、いずれも僧房窟に分類される石窟であり<sup>6</sup>、東西南北のほぼ全ての壁面にブラーフミー文字による題記が書かれており、その内の 16 本の古代期トカラ語 B 題記を前掲拙稿では紹介した。現在筆者が把握している古代期トカラ語 B 題記の殆どがこの二つの石窟に由来していることから、当該石窟は後代の重修などを経ず、何らかの理由で、そのままの状態では保存されてきたものと推定される。

筆者は当該石窟でこれらの題記の解読作業を行ったが、保存状況が悪く、十分に解読で

<sup>4</sup> 前掲 Pinault (1987) によって出版されたトカラ語 B 題記は、全て古典期及び後期トカラ語 B に分類されるものであり、トカラ語 B の断代史的研究や言語学的研究に大きく貢献するものであったが、古代期のものは知られていなかった。なお、現在トカラ語研究では、トカラ語 B 文献が言語特徴及び文字特徴の両面から、それぞれ三つの段階に分類される事が明らかになっている。即ち、言語特徴の面からは、Archaic Tocharian B (5-6 世紀), Classical Tocharian B (7 世紀), Late Tocharian B (8 世紀以降) に、一方文字特徴からは Archaic (5-6 世紀), Standard (7 世紀), Late (8 世紀以降) に分類される。この二つの分類の内、言語特徴からの分類については Peyrot (2008, 2014) を、文字特徴に基づく分類については Malzahn (2007) 及び Tamai (2011) を参照されたい。ただし、この二つの相関関係については、荻原 (2013) や Peyrot (2014) 及び本稿で指摘するように、再検討が必要である。なお、Peyrot (2014) は、Peyrot (2008) で使用していた口語トカラ語 B (colloquial Tocharian B) という概念を使用していない。

<sup>5</sup> 注 4 で言及したように、トカラ語 B の書写に使用されるブラーフミー文字の断代については、Malzahn (2007) 及び Tamai (2011) が検討しているが、本稿で扱う古代期トカラ語 B を書写するブラーフミー文字の分類に際しては、前者に附されたブラーフミー文字表が参考になる。

<sup>6</sup> この二つの石窟の詳細については、新疆龜茲石窟研究所 (2000: 237 及び 239) を参照。なお、当該石窟にブラーフミー文字による題記が書かれていることは、本書によって既に指摘されている。

きないものについては公表を控えていた。しかしながら、最終報告書の準備中、ドイツ探検隊によって撮影された当該石窟の写真が存在していることがわかり、幸いにしてこれらの写真を利用させて頂くことが可能になったことから、現地調査による結果と併せて、題記の解読に大きな進展が見られた。また、第 211 窟右側壁については、フランス探検隊も写真を撮影しており、これらの写真も参照させて頂いた。以下では、第 211 窟右側壁及び第 213 窟左側壁に書かれている、古代期トカラ語 B による題記韻文の解釈を行う<sup>7</sup>。

### 3. 韻文題記の解釈

#### 3-1. 第 211 窟右側壁

ドイツ探検隊撮影の写真では場所を特定できないが、現地調査によりキジル石窟第 211 窟主室右側壁に書かれていた題記に比定され、僅かに残存する部分から、この題記は炭によって書かれていたと見られる。フランス探検隊撮影の写真からは、ドイツ探検隊が撮影した部分の左側に、さらに 6-7 akšara 書かれていたことが窺え<sup>8</sup>、一行目冒頭部分には *daŋda* が見えることから、ここには韻律名が記されていたと考えられるが、写真からは解読することができない。一方、フランス探検隊撮影の写真から判断して、ドイツ探検隊撮影の写真に収められている部分の右側の壁面には akšara が書かれていなかったと考えられる。

また、その上方に書かれている題記と同様に、この題記は語頭母音の表記に特徴が見られる。即ち、母音<e><au>が語頭に立つ場合、通常使用される<e><au>といった母音文字が使用されることはなく、母音<a>の上に<e><au>を表す付加母音を附して表記される<sup>9</sup>。このような語頭母音の表記はトカラ語写本では非常に稀であり、この題記を記した者の言語背景だけでなく、西域北道におけるブラーフミー文字の歴史やトカラ語音韻史とも関連していると見られるが、詳細を明らかにし得ない。また、この題記には *lkatsi*, *kewc*, *eñksā* といった古代期トカラ語 B の言語特徴が散見されるが、<ma>を除いて、ブラーフミー文字には古代期の字体は殆ど見られない。

注目すべきは、他の多くのトカラ語 B 題記とは異なり、この題記が韻文で書かれている点である。ただし、現在確定できる *pāda* は主に 16-17 音節から成り立っているが、韻律を確定することができないため、暫定的に 16-17 音節から形成される *pāda* が中心となっているものとした<sup>10</sup>。この推定が正しいならば、当該題記には八詩節が含まれている事となり、現在知られているトカラ語 B 題記の内、最も長い韻文による題記と見做される。

<sup>7</sup> クチャ地域のその他のトカラ語 B 題記とは異なり、本稿で解釈を行う韻文題記は非常に丁寧に書かれているが、壁面に書かれているだけでなく、損傷が激しく、また探検隊撮影の白黒写真に基づいて解読を行ったため、不十分な解釈に留まっている部分も少なくない。それらについては、古代期トカラ語 B 資料の解読の進展に俟ちたい。なお、言語特徴・文字特徴から、これらの題記の年代は 5-6 世紀に比定される。

<sup>8</sup> 筆者が利用したフランス探検隊撮影の写真では解読は困難であったが、2 行目冒頭については、ドイツ探検隊の写真に写っていない部分の内、以下の転写の *prosko* [po] の箇所を解読することができた。

<sup>9</sup> 従来のトカラ語研究では、この種の母音を転写する方法が考案されていないため、ここではこの種の母音表記を利用するコータン語の転写方式を採用し、<e><au>と転写する。なお、この転写方法については、Skjærvø (2003: xxiv) を参照した。

<sup>10</sup> なお、本題記は、1 詩節を形成する 4 *pāda* の内の一部の *pāda* が、他とは異なる音節数を有する型の韻律である可能性がある。トカラ語 B 文献に在証される韻文の型については、Peyrot (2018: 337-343) を参照。

Kz-211-ZS-R-06<sup>11</sup>

# Transliteration

- 1 - - - - || - - ['au] nai ce i[ke] - [tka]<sup>[11]</sup> tarkkaññ· lkats[i] ñy[ā]tso  
[ʒ] krentam wnolementsā ā[tse] tatāk[au] ste [ra] k[ʃ]mā[ñ]k[al] yp[au]tse<sup>[2]</sup> ʒ  
teki snai[ts]ñesa srukaly[ñ]esa p̄arskoş kr<sub>u</sub>i ša ·[e]
- 2 - - - prosko [po] cmelaşsa 'em[pelya t]· [n]· y[ā]nmāskeṃ<sup>[3]</sup> ʒ 1 keṭ  
p[r]os(·)o neşā[m] k[l]eśanmaşşem sana[m]ntsā māk = empely· ntsa ʒ ke[wc a]t  
no añme skwa[s]u ñ(·)i ·ā - [w]i - lo - - - (-)
- 3 - - - - - - - [llyai] orotsai [ʒ: ś]l = oko klutkaşşi s[l]· - yne  
a[r]tta[s]tra kre[nt]au[na]ts<sub>u</sub> [mā]ka [ʒ] 2 lainma paryāntasa [gh]u[n]ma yşe  
ts· ntsa cankrāmāntasa ʒ kātka<sub>tar</sub> palskoy ko - tsra nem[c]e[k]· -
- 4 - - - - - - ·[o]rto[ntra] ·r· [ñ](·) [o]nolmi tsalpalyñe[ʃ]c<sub>u</sub> [ʒ] wo ll[i]  
y[n]e ne - - - pyā ·o - [spe]lke y[e]<sup>[4]</sup> - - [w](·) - [k]sişcā ʒ 3 tkā  
ra preke [s]e yolo 'em[p]e[l]e ste sā kartsauwñentse
- 5 - - - - - - [nta] nakşam [k]re[nt]au - -<sub>u</sub> - - s[t]· 'em[p]elyñeşc<sub>u</sub>  
[ʒ] krenta[n]<sub>u</sub> krentau - - lo [k]· [ñ]· - - kr[au pm]· [ñco] - -  
r[k]· - [ʒ] yol[ai] - [lai] ·ñ· ·o [pş]a kka ka tsamşanm[e] preke se ·e  
l<sub>u</sub><sup>[5]</sup> ʒ 4 mā [tai]kne ['e]
- 6 - - - - - - y[ā]knemem la[m]tsi ʒ [y]o[lai] ·[ñ]· -<sup>[6]</sup> [k](·)<sub>u</sub>i prek[e]  
s[e m](·)<sup>[7]</sup> ·[u] ·i wat<sub>u</sub> yo ·o kr<sub>u</sub>i [y]· mi - r<sub>u</sub><sup>[8]</sup> - - - ·au yk· nta  
klyentrā - - - [tn]· sai - krent[au]na[ts]<sub>u</sub> ʒ 'ente [y]· laiñ[e]nta yane - -  
lyñe [n]e -
- 7 - - - - - - [l]ū [j]· - - [n]i - - - - - - [kle]śanmaşş[emş  
cem] 'em[pely]· - - eñks[ā s]aim ·[e]<sup>[9]</sup> ram no ste ʒ a[tka p]ilk[onta]mem  
wse[nta]<sup>[10]</sup> nakts[i]šo [a]śa[ut]ra [s]e ·k· ste ʒ wat no kleśa[n]ma - ts[e]<sup>[11]</sup>  
k[ʃ]e
- 8 - - - - - - k[a] s[t]e<sup>[12]</sup> - - - tsñ[e]nts[e] - - [k]· - - st[e]  
nakşā[m] - te (·)[ñ]e - - - [ce] - - - [about 14 illegible akşaras]  
[ls]k· - na oñkolma -<sup>[13]</sup> ka ·ko -<sup>[14]</sup> ra rse<sup>[15]</sup>
- 9 - - - - - - [about 7 illegible akşaras] ste - ñkr[ā mn]· [about 10 illegible  
akşaras] rsam [about 9 illegible akşaras] ·[y]· - - - la - la [re ka] - - te

# Transcription

<sup>11</sup> 本稿では、新疆亀兹研究院・北京大学中国古代史研究中心・中国人民大学国学院西域歴史語言研究所によるプロジェクトで使用している原則に従って、題記の統一番号を与えている。統一番号の内、KZ はキジル、211 は窟番号、ZS は主室、R は右側壁を意味し、06 は壁面上方向かって左側より数えて、六番目の題記に相当する。なお、ここで使用する転写方式は、以下通りである。

[ ]: 破損によって読みが不確実な箇所	( ): 筆者によって推定された箇所
·: akşara の欠けている子音若しくは母音	ʒ: 題記中の punctuation
=: sandhi	{ }: 破損により推定された欠落部分

- 1 - - - - || - - 'au nai ce ike (śa)tkā<sup>[1]</sup> tārkkāññ(e) lkatsi ñyātso :  
krentām wnołmentsa ātse tatākau ste ra kśmāñkal ypautse<sup>[2]</sup> : teki snaitśñesa  
srukalyñesa pārskoś kr<sub>u</sub>i śa ·e
- 2 - - - prosko po cmelaśśa 'empelya t(a)n(e) yānmāśkem<sup>[3]</sup> : 1 ket pros(k)o  
nesām kleśanmaśśem sanamñtsā māk = empely(e)ntsa : kewc at no añme skwasu  
ñ(·)i ·ā - wi - lo - - - (-)
- 3 - - - - - (yo)llyai orotsai : śl = oko klutkāśśi sl· - yne arttāstrā  
krentaunats māk : 2 lainma paryāntasa ghunma yśe ts· ntsa cañkrāmāntasa :  
kātkāstār palskoy ko(s)ts ra nemcek· -
- 4 - - - - - (sp)ortontrā (k)r(e)ñ(cā) onolmi tsalpalyñeśc : wo lli yne ne  
- - - pyā ·o - spelke ye<sup>[4]</sup> - - w(·) - kśiścā : 3 tkā ra preke se  
yolo 'empele ste sā kārtsauwñentse
- 5 - - - - - nta nakśām krentau(nats) - - st· 'empelyñeśc : krentan  
krentau(na yo)lo k· ñ· - - krau pm· ñco - - rk· - : yolai(m  
yo)lai(y)ñ(e) ·o pśa kka ka tsamśān-me preke se (p)el(e)<sup>[5]</sup> : 4 mā taikne 'e
- 6 - - - - - yāknemem lamtsi : yolai(y)ñ(e) -<sup>[6]</sup> k(r)<sub>u</sub>i preke se  
m(·)<sup>[7]</sup> ·u ·i wat yo(l)o kr<sub>u</sub>i y(a)mi(ñtā)r<sup>[8]</sup> - - - ·au yk(e)nta klyentrā - -  
- tn· sai - krentaunats : 'ente y(o)laiyñenta yane(m) - - lyñe ne -
- 7 - - - - - lū j· - - ni - - - - - kleśanmaśśemś cem  
'empely(em) - - enksā saim ·e<sup>[9]</sup> ram no ste : atka pilkontamem wśenta<sup>[10]</sup>  
naktśiśo aśattra se(r)k(e) ste : wat no kleśanma - tse<sup>[11]</sup> kśe
- 8 - - - - - ka ste<sup>[12]</sup> - - - tsñentse - - k· - - ste nakśām -  
te (·)ñe - - - - ce - - - [about 13 illegible akṣaras] (pā)lśk(ośśa)na  
onkolma -<sup>[13]</sup> ka ·ko -<sup>[14]</sup> ra rse(r)<sup>[15]</sup>
- 9 - - - - - [about 7 illegible akṣaras] ste (sa)ñkrāmñ(e) [about 10 illegible  
akṣaras] rśam [about 9 illegible akṣaras] y· - - - la - la re ka - - te

# 注釈

- (1) この箇所には、語根 *kātk-* ‘to cross, traverse’の三人称単数過去形能動態の(śa)tkāが推定される可能性が高い。
- (2) 或いは *yp[o]tse* かも知れない。また、先行する *tatāk[au]* も *tatāk[o]* かも知れない。
- (3) <śka> の上方には付加母音 <e> の他に <i> も書かれているが、書き誤りと見られる。
- (4) 或いは <ya> とすべきかも知れない。
- (5) ここには *pele* ‘way’の単数主格形 *(p)el(e)* が推定される可能性が高い。
- (6) 前後の文脈が不明確なため、*yolaiññe* ‘evil’に後続する *akṣara* を推定できない。
- (7) 残存部分から、一見 *tsām-* ‘to cause to grow, promote’の三人称単数過去形 *tsem(sa)* が推定されるかも知れないが、この文は条件文であるため、この語形は不適格と考えられる。
- (8) 後続する *pāda d* には *i-* ‘to go’の三人称複数現在形 *yane(m)* が推定されるが、この部分に



対応するならば、*yām-* ‘to do’ の三人称複数願望法中動態 *y(a)mi(ntā)r* が推定される。

(9) 文脈が不明確なため、この箇所を推定できない。

(10) この箇所は損傷が激しいが、*[nta]* と読む事ができ、この読みが正しいならば、*wase\** ‘poison’ の複数主格・斜格形 *wsenta* と解釈され得る。なお、当該名詞の複数主格・斜格形は初出である。

(11) 或いは *ts[a]* とすべきかも知れない。

(12) 或いは *s[n]e* とすべきかも知れない。

(13) 先行部分が解読不能のため、*(pā)lsk(ošša)na* と *onkolma* の統語関係を明らかにし得ない。

仮に前者が後者を修飾していたならば、後者には複数属格形が推定される可能性が高い。

(14) ここには *kāskor\** ‘idle talk, gossip’ の古代期の形式 *ka(s)ko(r)* が推定されるかも知れない。

(15) 文脈は不明確だが、*rser* ‘hate’ が復元されるものと推定される。

## 韻文の復元<sup>12</sup>

— — — — ||

— — ‘au nai ce<sup>[1]</sup> ike (śa)tkā tārkkāññ(e)<sup>[2]</sup> lkatsi ñyātso<sup>[3]</sup> |  
krentām wnolementsā ātse tatākau ste ra kṣmāñka<sup>[4]</sup> ypautse<sup>[5]</sup> |  
teki snaitśñesa srukalyñesa pārskoṣ kr,i śa ·e — —  
— prosko po cmelašša ‘empelya t(a)n(e) yānmāskem || //1//

ket pros(k)o nesām kleśanmaṣṣem sanamntsā māk = empely(e)ntsa |  
kewc at no añme skwasu ñ(·)i ·ā — wi — lo — — — (—)  
— — — — — (yo)llyai orotsai |  
śl = oko<sup>[6]</sup> klutkāṣṣi sl· — yne arttāstrā krentaunats māka || //2//

lainma<sup>[7]</sup> paryāntasa<sup>[8]</sup> ghuṇma yṣe ts· ntsa cañkrāmāntasa<sup>[9]</sup> |  
kātkāstār palskoy ko(s)ts ra nemcek· —  
— — — — — (sp)ortontrā (k)r(e)ñ(cā) onolmi tsalpalyñeṣc |  
wolliynene<sup>[10]</sup> — — — pyā ·o — spelke ye — — w(·) — ksiścā || //3//

tkā ra preke se yolo ‘empele ste sā kārtsauwñentse  
— — — — — nta nakṣām krentau(nats) — — st· ‘empelyñeṣc |  
krentan krentau(na yo)lo k· ñ· — — krau pm· ñco — — rk· — |  
yolai(m yo)lai(y)ñ(e) ·o pṣa kka ka tsamṣān-me preke se (p)el(e) || //4//

mā taikne<sup>[11]</sup> ‘e — — — — — yāknemem lamtsi |

<sup>12</sup> 韻律を確定できないこと、並びに壁面に<>が書かれていない箇所については pāda の区切れを確定できないことから、ここではその箇所に対して、colon の区切れを示す<|>、pāda の区切れを示す<|>、韻文の末尾を示す<||>を表示しない。そのため、これらの前後の pāda の区切れは暫定的なものに過ぎない。

yolai(y)ñ(e) – k(r)<sub>u</sub>i preke se m(·) ·u ·i wat yo(l)o kr<sub>u</sub>i y(a)mi(ñtā)r  
 – – – ·au yk(e)nta klyenträ – – – tn· sai – krentaunats |  
 'ente y(o)laiyñenta yane(m) – – lyñe ne – – – – //5//

– – – lū j· – – ni – – – – –  
 kleśanmaṣṣeṃś cem 'empely(eṃ) – – eñksā<sup>[12]</sup> saim ·e ram no ste |  
 atka pilkontameṃ wsenta naktsiśo aśattra<sup>[13]</sup> se(r)k(e) ste |  
 wat no kleśanma – tse kṣe – – – – – ka ste //6//

\*以下の部分は欠落部分が多く、韻文を復元することができない。

– – – tsñentse – – k· – – ste nakṣām – te (·)ñe – – – – ce – – –  
 [about 13 illegible akṣaras] (pā)lśk(oṣṣa)na onkolma – ka ·ko – ra rse(r) – – –  
 – – – [about 7 illegible akṣaras] ste (sa)nkrāmn(e) [about 10 illegible akṣaras] rsaṃ  
 [about 9 illegible akṣaras] y· – – – la – la re ka – – te

#### 注釈

- (1) ここに在証される 'au が間投詞と解釈されるならば、欠落部分は weṣṣām 'he says'などの発話の冒頭に置かれる動詞であった可能性がある。
- (2) この語形は、語根 *tār-* 'to let go, release, give up'の接続法語幹から派生した Gerundive II による抽象名詞 *tārkālñe\**から、*-lñ->-ññ-*という同化を経て形成されたと見られる。なお、このような同化は、以下で扱う Kz-213-ZS-L-06 の第3詩節 *swārkaññe* にも確認され、Peyrot (2008 : 64-65) に指摘されるように、後期・口語トカラ語 B の特徴の反映と見做し得る<sup>13</sup>。
- (3) この語形は、*ñyās* 'desire'に所謂 *bewegliches -o* が附された形式と考えられる<sup>14</sup>。
- (4) この語形は初出であり、解釈が困難であるが、ここでは Skt. *kṣemam-kara-* 'conferring peace or security or happiness'の借用形式と考えた<sup>15</sup>。
- (5) この語形は初出であり、満足の行く解釈を与えることはできないが、名詞 *yapoy* 'land, country'の単数属格形 *ypoyntse* の書き誤り、或いは口語形式と見做した。
- (6) *śl = oko* は *śle oko* の sandhi の形式であり、字義によれば「結果を伴って」となるが、ここでは「果報として」のような意味を表すものと推定した。
- (7) この語形は、*lem* 'resting place'の複数主格・斜格形 *lenma* の書き誤りと見られる。
- (8) この語形は *paryām* 'cell'の複数通格形と見られるが、期待される語形は *paryānāntasa\**である。このように *-m* を語幹末に有する名詞の複数形が *-nta* で形成される際、語幹末の *-m*

<sup>13</sup> また、本題記には向格語尾 *-śc* に対して *-śc* (l. 4), *-ścā* (l. 4), *-śc* (l. 5), *-śo* (l. 7) と四つの variant が確認されるが、これらの諸形式は Peyrot (op.cit.: 72-75, 179-180) に指摘されるように、古代期トカラ語 B の語尾から古典期及び後期のトカラ語 B に見られる諸形式を含んでいる。この点は、一部の口語的特徴が文章語形成に際して採用されず、時代が下るとともに文章語に混入していったことを示唆し、トカラ語 B の断代や文章語形成過程の考察に重要な意味を有する。なお、トカラ語 B の韻文に informal style で使用される語形が見られる点については、Malzahn (2018) 及び当該論文中に引用される参考文献を参照。

<sup>14</sup> 所謂 *bewegliches -o* に関する体系的な研究については、Malzahn (2012a) を参照。

<sup>15</sup> この場合、Skt. *māṅgala-* 'happiness, welfare' との contamination 並びに第一音節母音の脱落が想定される。

と複数形語尾-*nta*の間の母音-*ä*が脱落することがあるが、この現象は *lakṣām* ‘characteristic’ の複数形 *lakṣān(ān)ta* にも見られる。

- (9) 前後の文脈とトカラ語 B の形態論から、*ghunma* は *ghu\** 或いは *ghum\** の複数主格・斜格形と見られるが、ここでは Skt. *guhā-* ‘cave’ に由来する借用語 *gu* ‘cave’ の複数主格・斜格形と見做した。また、後続する語形は *yṣets(e)\** 或いは *yṣets\** の複数通格形として設定される *yṣets(e)ntsa* 或いは *yṣets(a)ntsa*、*caṅkrāmāntasa* は *caṅkrāmā\** の複数通格形と解釈され、前者の語幹の語義は明らかにし得ないが<sup>16</sup>、後者は Skt. *caṅkramaṇa-* ‘place of promenade (for a monk)’ (BHS: 222b) の借用形式として推定される *caṅkrāmā\** を語幹としていると考えられる<sup>17</sup>。
- (10) この語形は初出であるため、この箇所の語の区切れだけでなく、語義も明らかにし得ない。或いは、名詞の双数処格形かも知れない。
- (11) ここに在証される *taikne* は *te yakne* と解釈されるが、この語形は一般には通格語尾-*sa* を伴った *taiknesa* ‘thus’ として副詞的に使用される。ここでは、斜格形が副詞的に使用されているものと推定される。
- (12) この箇所に見られる *eṅksā* は初出であるが、ここでは *eṅk-* ‘to take, seize’ の二人称単数命令法能動態の語形と解釈した。ただし、この語形は、命令法の形式に附される接頭辞 *p(ä)*- を欠いている。
- (13) この *[a]śa[tt]ra* も初出であり、暫定的に Skt. *aśatru-* ‘whom no enemy defies’ の借用語と見做したが、語末母音に-*a* を示していることから、後続する *serke* ‘circle, sequence’ と共に複合語を形成している可能性がある。

## 和訳

- 第1詩節: [...] ああ、彼は(人々が?)望みを放棄するのを見るために、この場所を渡った。善人達によって、国を安寧に導くものも豊かになった。もし病・貧困・死を恐れた者達が [...] あらゆる再生への不安は恐ろしい [...] 彼らはここに到達する。//1//
- 第2詩節: 諸々の煩惱による恐ろしい多くの敵達に対して恐れを抱く者は、高く、離れて、自らは(?)幸福な [...] 悪く、大きい [...] 果報として変えるだろう。彼は、諸々の功徳を喜ぶだろう。//2//
- 第3詩節: 彼は房・舎・石窟 [...] 経行処によって満足させ、考えるだろう。如何にすれば確実に [...] 善人達は解脱へと赴く [...] 努力 [...] するために [...] //3//
- 第4詩節: また必ず、悪く、恐ろしい時が訪れるだろう。功徳の [...] 滅ぼす(或いは「取り除く」)。功徳の [...] 恐怖へと [...] 善人達・功徳・悪 [...] 彼等の(或いは「人々の」?)

<sup>16</sup> 前後の文脈から寺院に附属する施設を指すと見られるが、この語が *y-* ‘in’ + *ṣe* ‘one, together’ + *-ts(ts)e* と分析されるならば、「僧坊」のような僧侶が居住する施設であったかも知れない。なお、トカラ語 A には ‘mat, couch’ と解釈されている *yṣits(ts)e\** という語が知られており、*y-* + *ṣi* + *-ts(ts)e\** と分析され得る。Pinault (2008: 552-553) に指摘されるように、Toch.A *ṣi* は Toch.B *ṣe* と同様に Common Tocharian \**ṣyæ* に遡り、本題記に在証される *yṣetse\** と同様の語形成と理解されるため、この解釈が正しければ、Toch.B *yṣetse\** も ‘mat, couch’ と解釈され得る。なお、Toch.A *yṣits(ts)e\** は、処格の形式のみが在証されている。

<sup>17</sup> この場合、先行する *parāyām* と同様に、語幹末の-*m* と複数形語尾-*nta*の間の母音-*ä*が脱落していると解釈される。



悪事・悪徳 [...] を、この時が増幅する。これがその法則である。//4//

第 5 詩節: そのように [...] ない。 [...] 習慣から離れること [...] もしこの時 [...] 悪徳 [...] 或いは、もし彼らが悪事を行えば [...] (これらの) 場所は残り続けるだろう [...] 功德の [...] 彼らが諸々の悪事に赴く時 [...] //5//

第 6 詩節: [...] これらの恐ろしい、煩惱よりなるものに対して [...] 避難所とすべきである。 [...] あたかも [...] の如くである。三昧(?) は知見より諸々の毒を取り除くためであり、敵が存在しない道である。或いは、また諸々の煩惱 [...] //6//

第 7-8 詩節: [...] の [...] は滅ぼす(或いは「取り除く」)。 [...] この(?) [...] 思惟の象達の(?) [...] 蜚語(?) により、また憎しみ [...] 僧院において [...]

古代期トカラ語 B の言語特徴の他に、本題記の特徴として、定動詞の時制・法を指摘することができる。即ち、過去の事態に言及していると見られる第 1 詩節の *śatka* 及び *tatākau* *ste* を除いて、定動詞は全て現在形・接続法・願望法・命令法の形式となっており、これは第 1 詩節 *pāda c* 以降の内容が未来の事態に言及しているためと考えられ、この推定が正しいならば、本題記は予言としての内容を叙述していると見做すことができる。また、第 4・第 5 詩節に見られる *preke* ‘time’ に注目すると、この二詩節は悪事が拡がる点に言及していることから、末法における状態を述べたものと考えることができ、末法思想を反映したものと解釈される。筆者が把握している範囲内では、トカラ語文献には末法思想を反映するものは指摘されていないため、本題記は 5-6 世紀頃のクチャ地域においても末法思想が知られていたことを示唆し、仏教史に対して重要な資料となる。

### 3-2. 第 213 窟左側壁

#### 3-2-1. Kz-213-ZS-L-01<sup>18</sup>

ドイツ探検隊の写真には位置を確定するものは残されていないが、現地調査によりキジル石窟第 213 窟主室左側壁に書かれていた題記に比定される。この題記は炭によって五行書かれており、三行目を除き、行末にはブラーフミー文字の数字で <1>, <2>, <4>, <5> と書かれている。この数字は本題記が韻文で書かれている事を示しており、実際に各行は多くの場合 punctuation によって四つの部分に分けられ、基本的にそれぞれが 14 音節から形成されている。本題記冒頭には韻律名は書かれていないが、第 1 詩節 *pāda b* 及び第 5 詩節 *pāda c* が 16 音節及び 15 音節となっている以外は、4 行×14 音節から形成されている<sup>19</sup>。なお、本題記のブラーフミー文字の内、<ṣa><ma><ta><ṇa> に common archaic と Malzahn (2007) が称する古代期に特徴的な字形が現れているが、これらは最も古い字形で書かれてはいない。

#### Transliteration

1 *k<sub>ṛ</sub>se nai ksa nke onolme o [s](·) {–} [lac](\ ) [s]n[ai] oṣṭaśc\ : [rek]· –*

<sup>18</sup> 前節の題記と同様の方式により、KZ はキジル、213 は窟番号、ZS は主室、L は左側壁を意味し、01 は壁面上方向かって左側より数えて、最も高い位置に書かれた題記に相当する。

<sup>19</sup> 既知のトカラ語 B 文献が当時知られていた全ての韻文の型を含んでいるとは考えられず、1 詩節を形成する 4 *pāda* の内の一部の *pāda* が、他とは異なる音節数を有する型の韻律である可能性も否定できない。

ra[ñc]ne [p]o š\ šaň\ [śa]mna re[r]inormem šlek [ñasa :] y[a]yātau wa  
wä[nt]ärwats\ sparkalyñem[em] r· sk[ai]ysa : läc\ osta[m]e[m] tsre[r]meše  
akalkäše wärkšälttsa :1

2 [ša] – [ñe]sa k· – nu sn[ai o]nmimš·e {–} lskosa : [šg]ñ\ [pal]sko – –  
– [s]ä[t] \ [s]u ·e [n]äñca šle pau ·o [a]kal[kä]n]tse p[k]· ly[ñ]ene ekitatse  
ptaka ñi : lalä[ña]š[a] pra[t]imnä mapi marsat\ šau\ wärñai :2

3 k[w]ri ñi stamat[s]y = aitko[r]ne kāsintse (–) {– –} ·l· : [t]rai ·[š]e (·)t[em]  
ne emp[ä]rkre ma [š]pā s[pa] – t\ [e]mpe[l]y· : t[k]a [ra] p[r]e – a  
[k]· [r]·<sup>[1]</sup> po klešanma krentāmpa no śmalyñesa p[t]tsamtsarne te –<sup>[2]</sup> –  
s· añmā[n]tse :<sup>[3]</sup>

4 i (·)[r]i ·[e t]šg š[e]rtwe[nsa m]ai w[ä]lkatā[r] \ (·)[o] l[m]ene :  
[su]krātā[tñ]e [pka]rsame [ce] cmeln[e] ka yne[m] po – [:] k<sub>u</sub>[s]e  
[m]· [a]šāmn\ [c]me[l]a[n]e [c]·e [t]rā [wa] ·[ai]še[ts] \ – [mts]· : – pi nta  
špā [e]rkat[ñ]e [tr]e[ñke] wärñai s[pa]rkatsi :4

5 s· š· š[ä]ke a – – [nauš]· – [ces] \ ·[n]· l·e [c]e : [t]rai (·)o  
[l]· [ts]· ·[o] – ·[o] se se – – šai [mā cra]<sup>[4]</sup> : – [kle]šanma [stapā]še  
tuñ – rta tsa ka ša[r]šāske[m] : k<sub>u</sub>se samtsārsa lalaloš\ [tā]ne ak[e]  
kälal[l]e :5

# Transcription

1 k<sub>u</sub>se nai ksa ñke onolme os(tamem) läc snai ostäsc : rek(i a)rāñcne po š  
šāñ śamna rerinormem šlek ñasa : yayātau wa wāntärwats sparkalyñemem  
(p)r(o)skaiysa : läc ostamem tsrermese akalkäše wärkšälttsa :1

2 ša(ma)ñesa k(eke)nu snai onmimš(s)e (pa)lskosa : šāñ palsko – – – sāt  
su ·e nāñca šle pau(t)o akalkāntse pk(e)lyñene ekitatse ptaka ñi : lalāñaša  
pratiñnä mapi marsat šaul wärñai :2

3 kwri ñi stamatsy = aitkorne kāsintse (–) {– –} ·l· : trai ·še (·)temne  
empärkre ma špā spa(rtta)t empely(em) : tka ra pre(ke) a k· r·<sup>[1]</sup> po  
klešanma krentāmpa no śmalyñesa pttamtsar-ne te –<sup>[2]</sup> – s· añmāntse :<sup>[3]</sup>

4 i(nd)ri (c)etsä šertwensa mai wälkatär (wn)olmene : sukrātātñe pkarsa-me ce  
cmelne ka ynem po – : k<sub>u</sub>se m(ai) ašāmn cmelane c(m)etrā wa (ś)aišets  
(sai)mts(a) : (mā)pi nta špā erkatñe trenke wärñai sparkatsi :4

5 s(e) š(pā) šāke a – – nauš· – ces (w)n(o)l(m)e ce : trai (·)o l· ts· ·o  
– ·o se se ik(e)ś aim-äc ra<sup>[4]</sup> : – klešanma stapāše tuñ – rta tsa ka  
šarsäskem : k<sub>u</sub>se samtsārsa lalaloš tāne ake kälalle 5

# 注釈

(1) この箇所の下には p[o] kwä r[au] : と書かれており、本文 a [k]· [r]· に対する修正と推定され、この読みが正しいならば、po は形容詞・副詞の po ‘all, wholly’ と、kwārau は kwär- ‘to

age, grow old’の過去分詞男性単数主格形と解釈される。また、先行する語は *pre(ke)* ‘time’ が推定されるかも知れない。

(2) ここには、<a>, <ka>或いは基字の下部に附される付加母音<u>のような痕跡が見える。

(3) 本題記の別の詩節から、末尾には<3>が期待されるが、ここには数字は見られない。

(4) 冒頭の *se se* に続く 2 akšara は、*[ik](e)* と解読できるかも知れない。

#### 韻文の復元<sup>20</sup>

*k<sub>u</sub>se nai ksa nke onolme | os(tameṃ) lāc snai ostāśc |*  
*rek(i a)rāñcne po š šāñ | śamna rerinormem šlek ṇasa<sup>[1]</sup> |*  
*yayātau wa wāntārwaṣ | spārkalyñmem (p)r(o)skaiysa |*  
*lāc ostameṃ tsrermēše | akalkāše wārksālttsa || //1//*

*ša(ma)ñesa k(eke)nu | snai onmiṃš(ś)e (pa)lskosa |*  
*šāñ palsko — — sāt | su ·e nāñca<sup>[2]</sup> śle pau(t)o |*  
*akalkāntse pk(e)lyñene | ekitatse ptaka ṇi |*  
*lalāñaṣa<sup>[3]</sup> pratimnā | māpi marsat śaul wārñai || //2//*

*kwri ṇi stamatsy = aitkorne | kāsintse (—) {— —} ·l· |*  
*trai ·še (·)temne<sup>[4]</sup> empārkre | ma spē spa(rtta)t empely(em) |*  
*tka ra pre(ke) a k· r· | po kleśanma krentānmpa |*  
*no śmalyñesa pttsamtsar-ne<sup>[5]</sup> | te — — s· aīmāntse || //3//*

*i(nd)ri (c)etsā šertwensa | mai wātkatār<sup>[6]</sup> (wn)olmene |*  
*sukrātātñe<sup>[7]</sup> pkarsa-me | ce cmelne ka ynem po — |*  
*k<sub>u</sub>se m(ai) ašāṃn<sup>[8]</sup> cmelane | c(m)etrā wa (ś)aiṣets (saī)mts(a) |*  
*(mā)pi nta spē erkatñe | trenke wārñai sparkatsi || //4//*

*s(e) š(pā) śāke a — — | nauṣ· — ces (w)n(o)l(m)e ce |*  
*trai ·(·)o l· ts· ·o — ·o | se se ik(e)ś aim-āc ra<sup>[9]</sup> |*  
*— kleśanma stapāše<sup>[10]</sup> | tuṃ — rta tsa ka śarsāskem |*  
*k<sub>u</sub>se samtsārsa lalaloṣ | tāne ake kālalle || //5//*

#### 注釈

(1) この形式は初出であるが、*ñyās* ‘desire’の単数通格形であると推定される。

(2) 語末形式から動詞の現在能動分詞と考えられるが、語根を確定することはできない。

<sup>20</sup> 本題記の韻律が 4 行×14 音節ならば、各行は 7 音節で形成される二つの colon から成り、またこれらの colon は概ね 4-7-11-14 番目の音節の後に置かれる caesura によって四つの subcolon に分割されるが、第 4 詩節 pāda c の後半はこの区切れに一致していない。なお、Bross, Gunkel and Ryan (2014: 7-8) によると、4 行×14 音節で形成される韻文については、7 音節目の後に置かれる caesura に背反する例は知られておらず、この点は本題記でも維持されている。

- (3) 初出の形式であるが、*lāt-* ‘to go out’の使役形・過去分詞男性単数斜格形かも知れない。ただし、この場合には書き誤りがあり、期待される形式は *l(e)lāñāṣa* (= *lelāñāṣ*) となる。
- (4) 最初の *akṣara* の基字の子音を確定する事ができないが、文脈から *spertte* ‘function (?)’の複数処格形 *spertemne* の書き誤りかも知れない。和訳では、暫定的にこの解釈を採用する。
- (5) 初出の形式であるが、*tsām-* ‘to grow’の使役形・二人称単数命令形中動態の形式に、代名詞接辞複数形を附したものと解釈される。ただし、この定動詞に附された代名詞接辞の指示対象を確定することはできない。
- (6) この形式も初出であり、語義を確定する事ができない。ただし、語形から、動詞 *wālk-\** の三人称単数現在形或いは接続法(共に第 V 類)中動態の形式であると考えられる。
- (7) 初出の形式であるが、サンスクリットからの借用語を語幹として、形容詞・抽象名詞派生接尾辞-*ññe* によって派生された形式と見られる。サンスクリットには *sukrātāt* に対応する語は確認されないが、恐らく *sukṛta-* ‘virtue, righteous deed’に関係づけられる。即ち、類似の語形成として Toch.B *krātaññe* ‘active, beneficial(?)’及び *krātaññe* ‘grateful, thankful(?)’が指摘され、前者は Skt. *kṛta-* ‘deed, benefit’を語幹としているが、後者は来源不明の-*t-*を伴っており、この *sukrātātñe* も Skt. *sukṛta-*から同様の方法で形成されたと考えられる。
- (8) 語形から、動詞の三人称単数現在形或いは接続法能動態の形式と判断される。文脈から語根を確定する事は困難であるが、既知の語根では *ās-* ‘to bring, fetch’の三人称単数現在形或いは接続法能動態である *āṣṣām* の古代期の形式であるかも知れない。また、先行する <ma>は否定辞 *mā* の可能性もあるが、文脈から *mai* ‘perhaps’と推定した。
- (9) 冒頭の *se se* に続く 2 *akṣara* は、*[ik](e)*と解読できるかも知れず、もしこの読みが正しければ、この部分を *se se [ik](e)ś ai[m-āc ra]* とし、*ikeś* を *ike* ‘place, position’の単数向格形と、また後続する *aimāc* は、語根 *ai-* ‘to give’の一人称複数接続法能動態の形式に代名詞接辞二人称単数形が附されたと解釈される。
- (10) 初出の語形であるが、*stap\**を語幹とする形容詞の男性単数主格・斜格形、若しくは当該形容詞が名詞化したものと解釈される。語幹 *stap\**の語義を確定する事はできないが、Skt. *stava-* ‘praise’の借用語かも知れない。なお、未公開のロシア所蔵トカラ語 B 断片 SI 2997-1 (= SI B 123) a1 には *stapanmasa* という形式が在証され、これは *stāp\**の複数通格形と解釈されるが、前後の文脈が欠落しており、語義を確定できない。本題記に在証される *stap\**は、この *stāp\**の古代期の形式である可能性が高い。

## 和訳

第 1 詩節: 願いに従って、言葉と心において、全ての親族を捨て去り、住著のない状態を目指して出家した者は、諸物が減じる恐怖に御せられ、溝のような [= 強い] 願望の力によって家を離れた。//1//

第 2 詩節: 沙門の身分と後悔のない心を備えた者は、自尊心を以て [...] する者であり、自らの思いを [...]。願望が実現する際には、あなたは私の協力者となれ。生涯、あなたが発せられた決心を忘れないように。//2//

第 3 詩節: もし師の命令において私が留まる事 [...] 三有支(?)の長きにわたり、あなたは

恐ろしい存在のままに留まる事はないだろう。そして、時は(?) [...] <sup>21</sup> 一切の苦悩と善行と共にある事で、あなたは自らの(或いは「願いの」) [...] を増さねばならない。//3//

第4詩節：彼らの(或いは「それらの」)煽動によって、衆生の感覚器官は [...]. あなたは、彼らの徳行(?)を知らねばならない。我々は全て [...] 次の生に赴く。諸々の生に(衆生を?)導く者は、人々の避難所として生まれる。怒りや執着などを取り除くために。//4//

第5詩節：この釈迦族の者は [...] 以前 [...] この人を [...] 三つ(?) [...] これはそれぞれ(その)場所へ通ずるものであり、我々もあなたに(それを)与える(?)。 [...] 種々の苦悩や賞賛の(?) [...] 彼等は説く。輪廻の中で努力する者達、(その者達に対しては)この世において終りがもたらされ得る。//5//

### 3-2-2. Kz-213-ZS-L-06<sup>22</sup>

前節で扱った Kz-213-ZS-L-01 の下に書かれている題記で、同様に炭によって書かれている。現在は、この題記の中間以降が、当該石窟の番号を示す<213>と大書された数字に覆われており、解説は非常に困難である。この題記は四行からなっており、写真から確認される範囲内では、二行目及び三行目の行末に、ブラーフミー文字の数字で<2>, <3>と記されている。また、各行は四つの部分に分けられるが、それらの半数強が14音節から形成されており、残存している限りでは pāda の末尾に punctuation が置かれていることから、韻文である事が窺える。

本題記冒頭には韻律名は書かれていないが、第1詩節 pāda c・第2詩節 pāda b, c・第3詩節 pāda b, d 及び第4詩節 pāda a, c が、それぞれ15音節・15音節・13音節・13音節・13音節・16音節・13音節で形成されている以外は、全て14音節から成っている<sup>23</sup>。なお、本題記のブラーフミー文字の内、<ta>に common archaic と Malzahn (2007) が称する古代期に特徴的な字形が現れているが、最も古い字形で書かれてはいない。

#### Transliteration

- 1 ku<sup>[1]</sup> [tsa n]ai ·[k]ai<sup>[2]</sup> klyomo[s]i<sup>[3]</sup> [k<sub>u</sub>s]aiṣṣeñ[ya ṣ]ewi w· ske(·) : k[a] s[e kre]ntats\ śarwarññe [ṣ<sub>g</sub>kwa] aṇuṣṣe [k<sub>a</sub>]nmāskem : ce kk[a] wār[k]ṣa\ [kca] kleśa[nma]ts\ speltke nautsi a[yato : mā] — tsana krentats[o] te ra [w]eskem śle nitsa[ṣ]\ [ṣ:1]
- 2 [ā]paṣṣ[e]tse k<sub>u</sub>wāsnaṭar\ wā r· lyñeṣṣe lā[k]lesa : wārpaḷaṇñe k<sub>u</sub>wāsnaṭar\ {-} tra — {-} (-) — — [sā]<sup>[4]</sup> traṇkaḷy[ñ]e [k<sub>u</sub>w· sna[ia]r\ [kaka]lyñeṣṣe — klesā : skeyye — p· mā neṣam — [soṣ]\ — l(·)e [k<sub>u</sub>wāsnaṭar\] :2

<sup>21</sup> 行間に追加された修正に従えば、この箇所は「そして、あらゆる時は年を取った[= 過ぎ去った]」と和訳される。

<sup>22</sup> 前節の題記同様の方式により、KZ はキジル、213 は窟番号、ZS は主室、L は左側壁を意味し、06 は壁面上方向かって左側より数えて、六番目の題記に相当する。

<sup>23</sup> 本題記に在証される16 pāda の内の7 pāda が14音節から形成されておらず、1詩節を形成する4 pāda の内の一部の pāda が、他とは異なる音節数を有する型の韻律である可能性も否定できない。ただし、在証されるトカラ語Bの韻律を網羅的に調査した Peyrot (2018: 337-343) には、本題記の韻律と一致するものは見られない。



- 3 *ñuw[e]t̥säñe k<sub>u</sub>wäsnat̥ar\ ktsait̥säñeṣṣe la (·)esa : ktsait̥säñe [a]miškem te ka*  
*– [s̥]e l̥akles[a] : y[ā]ta – – kwäsnant̥ar\ sp̥a[r]ka[l]y[ñ]e[ṣṣ]e (–) l̥aklesa :*  
*s[ʷ]ärkaññe k<sub>u</sub>w· sn· t̥ar\ [sru]kalyñeṣṣe l̥a[kle]sa :3*
- 4 *okt\ l̥ak[l]e[nta] waip̥tayär\ [t̥a]ñ· [r]· [l]ñ· [l̥a] ·[l]· – k<sub>u</sub>wäsnat̥ar\ : – kt\*  
*[tp̥]ā[n]e p̥a [kl]· [s̥]· – – – lyñe (·)[ā] – – – r\ – – – – r\*  
*k<sub>u</sub>w[ā]snat̥ar\ ya[m]o[r]nt̥[a] – – – s[n]ai pelecce – lai[kn]e – ·[e] – –*  
*kreñc\ ·[e] ·em : (–)*

# Transcription

- 1 *k<sub>u</sub>(se)<sup>[1]</sup> tsa nai (ñ)k(e)<sup>[2]</sup> klyomoṣi<sup>[3]</sup> k<sub>u</sub>ṣaiṣṣeñya ṣewi w(e)ske(m) : ka se*  
*krentats śarwarññe s̥akwa añuṣṣe k̄nmāskem : ce kka wärkṣäl kca kleśanmats*  
*speltke nautsi ayato : mā(la)tsana krentätso te ra weskem śle nitsas :1*
- 2 *āpaṣṣetse k<sub>u</sub>wäsnatār wār(pa)lyñeṣṣe l̥ä[k]lesa : wārpalāññe k<sub>u</sub>wäsnatār {–}*  
*trā(ñkālyñe l̥äkle)sā<sup>[4]</sup> trāñkālyñe k<sub>u</sub>w(ā)snatār kakalyñeṣṣe (l̥ä)klesā : skeyye –*  
*p· mā nesām – sos – l(·)e k<sub>u</sub>wäsnatār :2*
- 3 *ñuwetsāñe k<sub>u</sub>wäsnatār ktsaitsāñeṣṣe l̥ä(kl)esa : ktsaitsāñe [a]miškem teka(nma)ṣe*  
*l̥äklesa : yāta(lyñecci) kwäsnantār spärkalyñeṣṣe (–) l̥äklesa : swärkaññe*  
*k<sub>u</sub>w(ā)sn(a)tār srukalyñeṣṣe l̥äklesa :3*
- 4 *okt l̥äklenta waip̥tayär t̄āñ (ts)r(e)l̄ñ(e) l̄ä(k)l(esā) k<sub>u</sub>wäsnatār : (o)kt tp̄āne*  
*(s)p̄ä kl(e)s̄(anma) – – lyñe(s)ā (k<sub>u</sub>wäsnatā)r – – – – r k<sub>u</sub>wäsnatār yamornta*  
*– – – snai pelecce (pe)laikne – ·e – – kreñc ·e ·em : (–)*

# 注釈

- (1) 関係代名詞主格形 *k<sub>u</sub>se* <*k<sub>u</sub>se*>の書き誤りと見られる。
- (2) 語頭の子音を確定できず、正しい推定を行い得ないが、前節で扱った Kz-213-ZS-L-01 の第1詩節冒頭を参考にすれば、小辞 *nke* ‘then’ <*nke*>の書き誤りと考えられる。
- (3) 語末の *akṣara* は *[s̥]i* かも知れないが、ここでは *[s̥]i* と見做した。
- (4) 文脈から *trā(ñkālyñeṣṣe l̥äkle)[sā]* と再建されるが、この場合当該 *pāda* は 15 音節になる。

# 韻文の復元

*k<sub>u</sub>(se) tsa nai (ñ)k(e) klyomoṣi<sup>[1]</sup> | k<sub>u</sub>ṣaiṣṣeñy(ai)<sup>[2]</sup> ṣewi w(e)ske(m) |*  
*ka se krentats śarwarññe | s̥akwa añuṣṣe k̄nmāskem |*  
*ce kka wärkṣäl kca kleśanmats | speltke nautsi<sup>[3]</sup> ayato |*  
*mā(la)tsana<sup>[4]</sup> krentätso | te ra weskem śle nitsas<sup>[5]</sup> || //1//*

*āpaṣṣetse<sup>[6]</sup> k<sub>u</sub>wäsnatār | wār(pa)lyñeṣṣe l̥äklesa |*  
*wārpalāññe k<sub>u</sub>wäsnatār | {–} trā(ñkālyñeṣṣe l̥äkle)sā |*  
*trāñkālyñe k<sub>u</sub>w(ā)snatār | kakalyñeṣṣe (l̥ä)klesā |*  
*skeyye – p· mā nesām | – sos – l(·)e k<sub>u</sub>wäsnatār || //2//*

ñuwetsāñe<sup>[7]</sup> k<sub>u</sub>wāsnatār | ktsaitsāññeşşe lä(kl)esa |  
 ktsaitsāñe amişkem<sup>[8]</sup> | teka(nma)şe läklesa |  
 yāta(lyñecci) kwāsnantār | spärkalyñeşşe (→) läklesa |  
 swärkaññe<sup>[9]</sup> k<sub>u</sub>w(ä)sn(a)tār | srukalyñeşşe läklesa || //3//

okt läklenta<sup>[10]</sup> waipstayār | täñ (ts)r(e)lñ(e) lä(k)l(esä) k<sub>u</sub>wāsnatār |  
 (o)kt tpāne<sup>[11]</sup> (ş)pä kl(e)s(anma) | - - lyñe(s)ā (k<sub>u</sub>wāsnatā)r |  
 - - - - r k<sub>u</sub>wāsnatār | yamornta - - - |  
 snai pelecce<sup>[12]</sup> (pe)laikne | - ·e - - kreñc ·e ·em || //4//

### 注釈

- (1) 初出の語形であるが、形容詞 *klyomo* ‘noble’が名詞化の上、形容詞派生接尾辞-*şşe* によって形成された形容詞の男性複数主格形と見られ、後続する *w(e)ske(m)*の主語と見做した。
- (2) この形式は、[*k<sub>u</sub>ş*aişşeñ[y](ai)]の書き誤りであるかも知れない。この推定が正しいならば、形容詞派生接尾辞-*ññe* によって派生された形容詞 *k<sub>u</sub>şaişşeññe\**の女性単数斜格形と見做することができるが、このような形容詞はこれまで在証されていない。一方、語幹として推定される *k<sub>u</sub>şaişşe* ‘prtng to a village’は *k<sub>u</sub>siye\** ‘village’から形容詞派生接尾辞-*şşe* によって派生された形容詞であるが、ここでは名詞化して語幹を形成していると見られる。全体として、*k<sub>u</sub>şaişşeññe\**は「村人の」を指し、「愚鈍な」といった意味を含むと推定される。
- (3) この語形はこれまで知られていないが、文脈から、*naut-* ‘to disappear’の不定詞である *nautatsi* 或いは同一語根の使役形の不定詞である *nautätsi* ‘to destroy’の書き誤りと見られる。ただし、前者の不定詞形は、後者の使役形の意味でも使用されるだけでなく<sup>24</sup>、同じ三音節で形成されていることから、いずれの形式とも判断し難い<sup>25</sup>。ここでは、*warkşäl* ‘strength’が直接目的語と解釈されることから、意味的には後者と見られる。
- (4) 確実な推定とは言えないが、暫定的に既知のトカラ語 B の語彙から *mālatse\**の女性複数主格・斜格形を推定した<sup>26</sup>。この形容詞が、後続する *kartse* ‘good person’の男性複数属格形 *krentätso* を修飾しているのならば、当該形容詞の男性複数斜格形として推定される *mālacecm\**が期待されるため、*krentätso* を修飾しているとは考えられない。ここでは、この形容詞を主語と見做したが、先行する *kleśanma* と同じく女性形であるため、主語を *kleśanma* と考えた。
- (5) 名詞の斜格形と推定されるが、初出の語であるため、語義を推定できない。
- (6) 初出の語であるが、形容詞派生接尾辞-*ts(ts)e* によって *āpaşşe\**から派生された形容詞と考えられる。語幹の *āpaşşe\**は *āp* ‘water, flood’から派生された形容詞であるが、ここでは名詞化して、当該形容詞の語幹になっていると見られる。文脈を考慮に入れると、ここに在証される *āpaşsetse* は、「水生の」を指すと推定される。

<sup>24</sup> この用法については、TEB I: 184 を参照。

<sup>25</sup> 本題記では *nautsi* となっていることから、前者の書き誤りの可能性が高い。

<sup>26</sup> この語形を Pinault (2008: 337) は *mālo* ‘a kind of intoxicating drink’から派生した形容詞と見做しているが、Adams (2013a: 482) は抽象名詞と解釈している。ここでは、前者の形容詞の解釈を採用した。

- (7) Adams (2013a: 292) はこの語に対して‘youth’と‘novelty’の二つの語義を提示しているが、文脈からは前者の語義が相応しいと考えられる。
- (8) 後続する *tekanmaše* の語幹である *teki* ‘disease, illness’の複数形 *tekanma* を修飾しているのであれば、文脈から期待される語形は *amiške* ‘despondent’の女性複数斜格形 *amiškana* であるが、ここに在証される *amiškeṃ* は男性単数斜格形であり、性・数が一致しない。ここでは、*tekanmaše* と同様に、後続する *läkle[sa]* を修飾していると考えた。
- (9) 初出の語形であるが、*spärk-* ‘to disappear, perish’の接続法語幹に由来する Gerundive II による抽象名詞 *spärkalñe* から、*-lñ-* > *-ññ-* という同化を経て形成されたと見られる<sup>27</sup>。なお、このような同化は、先に扱った Kz-211-ZS-R-06 の冒頭 *tärkkäññ(e)* にも在証される。また、この箇所では先行する *yätalñetstse* ‘powerful, capable’と対立する対象を指示していると考えられるため、「力のない」という意味で用いられていると見られる。
- (10) ここでの *okt läklenta* 「八苦」とは、先行する二詩節で言及されている八つの苦しみを指していると思われる。
- (11) 初出の語であり、語義を確定する事はできないが、使役形のみが知られている語根 *täp-* ‘to announce’に属する語形と見做し、当該語根の基本形・三人称単数過去能動態の形式として設定される *tapa\** に、代名詞接辞三人称単数形が附された形式と見做した。或いは、語末の *ne* を処格語尾と見做し、先行する語幹の斜格形を *tapa\** とし、ここから主格形を *tapo\** とする推定も可能かも知れない。
- (12) 初出の語形であるが、*snai pele* ‘unlawful, lawless’に形容詞派生接尾辞 *-ts(ts)e* が附されて形成された形容詞の男性単数斜格形である。

## 和訳

- 第 1 詩節：聖者たる者達が、村人の弁明を述べる。善人達には、この自尊心と寂靜による幸福が訪れる。(彼等は)、この諸々の苦悩による力を減ぼす努力(を行う)に相応しい。人を溺れさせる諸々の苦悩(?)は、善人達に [...] を以て、また以下のように述べる。//1//
- 第 2 詩節：水生の生き物は、捕まえられる苦しみを悲しむ。捕まえられるものは、[自らの死を]嘆かれる苦しみを悲しむ。[自らの死を]嘆かれるものは、[死の神に]呼ばれる苦しみを悲しむ。[...] 努力はない。[...] は悲しむ(3sg.)。//2//
- 第 3 詩節：若者は、老いる苦しみを嘆く。老いた者は、諸々の病の絶望的な苦しみを(嘆く)。権力や能力を有する者達は、(権力や能力が)消え去る事を悲しむ。力のない者は、死の苦しみを悲しむ。//3//
- 第 4 詩節：彼は、八苦及びあなたと離れて別れる苦しみを悲しむ。彼は、八苦を彼に伝えた。[...] を悲しむ(3sg.)。[...] 悲しむ(3sg.)。諸行 [...] 法に適わない法 [...] 善人達は [...]。//4//

## 3-3. 韻文の技巧について

<sup>27</sup> この語形は語頭で *sp-* > *sw-* の音変化を示しており、口語的特徴を反映すると見られる。なお、Peyrot (2008: 88-90) は、語頭の摩擦音に後続する場合の *Cp-* > *Cw-* について指摘していない。

本節では、上で解釈した三つの題記に見られる韻文の技巧について検討する。トカラ語 B の韻文で利用される技巧については、Winter (1959) 以来複数の研究が発表されており<sup>28</sup>、特に近年、従来知られていた各 *pāda* に配置される音節数の他に、強弱アクセントの配列パターンや特定の語形・音素の繰り返し、また特定の位置に配置される clitic の使用といった技巧の存在も指摘されている<sup>29</sup>。本稿で扱っている題記はいずれも古代期トカラ語 B で書かれており、古典期トカラ語 B のように、強弱アクセントの位置に関する情報が文字使用に反映されにくいいため、ここでは特定の語形・音素の繰り返し及び韻文における clitic の特徴的な配置について確認するが、以下の引用では、特定の語形・音素の繰り返しに相当すると見られる箇所を太字で示し、clitic には下線を附す<sup>30</sup>。なお、Kz-211-ZS-R-06 は第 7・第 8 詩節を復元できないため、ここでは第 6 詩節までを扱う。

## Kz-211-ZS-R-06

— — — — ||  
 — — 'au nai ce ike (śa)tkā tārkkāññ(e) lkatsi ñyātso |  
**krentām** wnołmentsa ātse tatākau ste ra kśmāñkal ypautse |  
 teki snaitśñesa srukalyñesa pārskoś kr<sub>u</sub>i śa ·e — —  
 — **prosko** po cmelaśśa 'empelya t(a)n(e) yānmāskem || //1//  
  
**ket pros(k)o** nesām kleśanmaśsem sanamntsā māk = empely(e)ntsa |  
 kewc at no añme skwasu ñ(·)i ·ā — wi — lo — — — (—)  
 — — — — — (yo)llyai orotsai |  
 śl = oko klutkāśši sl· — yne arttāstrā **krentaunats** māka || //2//  
  
 lainma paryāntasa ghunma yše ts· ntsa cankrāmāntasa |  
 kātkaštār palskoy ko(s)ts ra nemcek· —  
 — — — — — (sp)ortontrā (k)r(e)ñ(cā) onolmi tsalpalyñeśe |  
 wolliynene — — — pyā ·o — spelke ye — — w(·)· — kśiścā || //3//

<sup>28</sup> Winter (1959) は学会での発表の要約に過ぎず、その議論全体については近年存在が明らかになった Winter (1957) を参照。

<sup>29</sup> 前者に関する代表的な研究としては、Adams (2003, 2013b) を、clitic の配置については Malzahn (2012b) を参照。ただし、語形・音素の繰り返しには、類似の語形・音素も含まれる。また、Zimmer (1997) は、トカラ語 A 文献を利用して、特定の語形・音素の繰り返しが重要な役割を果たしている点を指摘した。なお、Malzahn (2012b) が扱っている clitic は、*no* 'but', *ra* 'also', *wa* 'then, nevertheless', *wat* 'or', *spā* (*śāp*, *sp*, *s*) 'and', *nai* 'surely', *pi* 'surely', *ka* 'indeed', *tsa* 'indeed', *nta* 'somehow', *ksa* 'someone, anyone' であり、散文同様に韻文においても、これらの clitic が概して Wackernagel の法則に従って、*pāda* 及び (sub)colon 中の二番目の位置に置かれる点を指摘している。

<sup>30</sup> ここでは、clitic の位置を検討するため、先行部分で使用した記号に加えて、subcolon の区切れを<>で示す。ただし、Kz-211-ZS-R-06 は韻律を確定できないため、この記号を加えない。また、韻律が要求する音節数に一致しない箇所は subcolon の区切れを確定できず、暫定的なものに過ぎない。なお、Peyrot (2018: 329-330) は古代期トカラ語 B による韻文の特徴として五項目の特徴を列挙するが、本稿で扱っている韻文はそのいずれの項目にも合致しない。

tkā ra preke se yolo 'empele ste sã kãrtsauwñentse  
 — — — — — nta nakšãṃ krentau(nats) — — st' 'empelyñešc |  
 krentan krentau(na yo)lo k· ñ· — — krau pm· ñco — — rk· — |  
 yolai(m yo)lai(y)ñ(e) ·o pša kka ka tsamšãn-me preke se (p)el(e) || //4//

mā taikne 'e — — — — — yäkmem lamtsi |  
 yolai(y)ñ(e) — k(r)<sub>u</sub>i preke se m(·)· ·u ·i wat yo(l)o kr<sub>u</sub>i y(a)mi(ntä)r  
 — — — ·au yk(e)nta klyenträ — — — tn· sai — krentaunats |  
 'ente y(o)laiyñenta yane(m) — — lyñe ne — — — — //5//

— — — lū j· — — ni — — — — —  
 klešanmaššemš cem 'empely(eṃ) — — enksã saim ·e ram no ste |  
 atka pilkontameṃ wsenta naktsišo ašattra se(r)k(e) ste |  
wat no klešanma — tse kše — — — — — ka ste //6//

Kz-213-ZS-L-01

4×14 = 7/7 (4-3-4-3)

k<sub>u</sub>se nai ksa ñke ; onolme | os(tameṃ) lüc ; snai ostäšc |  
 rek(i a)räñcne ; po š šãñ | šamna rerinormem ; šlek ñasa |  
 yayātau wa ; wäntärwats | spärkalyñemem ; (p)r(o)skaiysa |  
 lüc ostameṃ ; tsrermese | akalkäše ; wärkšältsa || //1//

ša(ma)ñesa ; k(ke)nu | snai onmiṃš(s)e ; (pa)lskosa |  
 šãñ palsko — ; — — sät | su ·e nãñca ; šle pau(t)o |  
 akalkäntse ; pk(e)lyñene | ekitatse ; ptaka ñi |  
 lalãñaša ; pratimnä | mäpi marsat ; šaul wärñai || //2//

kwri ñi stamatsy = aitkorne | käšintse (→) ; {→ →} ·l· |  
 trai ·še (·)temne ; empärkre | ma spä spa(rtta)t ; empely(eṃ) |  
 tka ra pre(ke) ; a k· r· | po klešanma ; krentänmpa |  
no šmalyñesa ; pttamsar-ne | te — — s· ; añmāntse || //3//

i(nd)ri (c)etsä ; šertwensa | mai wäkatär ; (wn)olmene |  
 sukrätatñe ; pkarsa-me | ce cmelne ka ; ynem po — |  
 k<sub>u</sub>se m(ai) ašãmn ; cmelane | c(m)eträ wa ; (š)aišets (sai)mts(a) |  
 (mä)pi nta spä ; erkatñe | trenke wärñai ; sparkatsi || //4//



s(e) s(pä) šāke ; a – – | nauš· – ces ; (w)n(o)l(m)e ce |  
 trai ·(·)o l· ts· ; ·o – ·o | se se ik(e)ś ; aim-āc ra |  
 – klešanma ; stapāše | tuṃ – rta tsa ; ka šarsāskem |<sup>31</sup>  
 k<sub>u</sub>se samtsārsa ; lalaloš | tāne ake ; kälalle || //5//

Kz-213-ZS-L-06<sup>32</sup>

k<sub>u</sub>(se) tsa nai (ñ)k(e) ; klyomoši | k<sub>u</sub>saiššeñy(aī) ; šewi w(e)ske(ṃ) |  
ka se krentats ; šarwarññe | s<sub>ə</sub>kwa aṇuše ; kāmāskeṃ |  
 ce kka wārksāl ; kca klešanmats | speltke nautsi ; ayato |  
 mā(la)tsana ; krentātso | te ra weskeṃ ; šle nitsas || //1//

āpašsetse ; k<sub>u</sub>wāsnatār | wār(pa)lyñeše ; lāklesa |  
 wārpālāññe ; k<sub>u</sub>wāsnatār | {-} trā(ñk)lyñeše ; lāklesā |  
 trāñk)lyñe ; k<sub>u</sub>w(ā)snatār | kakalyñeše ; (lā)klesā |  
 skeyye – p· ; mā nesām | – sos – l(·)e ; k<sub>u</sub>wāsnatār || //2//

ñuwetsūñe ; k<sub>u</sub>wāsnatār | ktsaitsūññeše ; lā(kl)esa |  
 ktsaitsūñe ; amiškeṃ | teka(nma)še ; lāklesa |  
 yāta(lyñecci) ; kwāsnantār | spārkalylñeše (-) ; lāklesa |  
 swārkaññe ; k<sub>u</sub>w(ā)sn(a)tār | srukalyñeše ; lāklesa || //3//

okt lākleta ; waipṭayār | tāñ (ts)r(e)lñ(e) lā(k)l(esā) ; k<sub>u</sub>wāsnatār |  
 (o)kt tpāne (s)pā ; kl(e)ś(anma) | – – lyñe(s)ā ; (k<sub>u</sub>wāsnatār)r |  
 – – – – r ; k<sub>u</sub>wāsnatār | yamornta ; – – – |  
 snai pelecce ; (pe)laikne | – ·e – – ; kreñc ·e ·em || //4//

以上に示した如く、これら三つの題記にも特定の語形・音素の繰り返しが顕著に認められる。この点を指摘した Adams (2013b) は、題記を含む古典期トカラ語 B による韻文のみを扱っていたが、こういった技巧が古代期の時期に既にトカラ語 B の韻文で使用されていた点を、これらの題記は示している。特に注目されるのは、Kz-213-ZS-L-06 の第 2・第 3 詩節である。この二つの詩節は八つの苦しみに言及しているが、ここに含まれる pāda はほぼ同様の構造を採っており、単なる押韻を越えた、同一の syntax の繰り返しのよって得られる聴覚的印象といった、韻文の技巧に対する作者の明らかな意図を感じさせる。

また、clitic の配置については、古代期の韻文も含めて分析した Malzahn (2012b) が指摘し

<sup>31</sup> この箇所は、ka の後に subcolon の区切れが存在していた可能性も排除されない。

<sup>32</sup> 本題記には、Kosta (1988) で扱われている pāda 及び(sub)colon 末尾における通格語尾-sa の母音が長母音 <a> で表記される現象も散見される。なお、Kz-211-ZS-R-06 の第 2 詩節 pāda b に在証される sanamntsā も同様の表記として解釈される。

ているように、これら三つの題記、特に Kz-213-ZS-L-01 及び Kz-213-ZS-L-06 において、概して Wackernagel の法則に従って、pāda 及び(sub)colon 中の二番目の位置に置かれている点を確認される<sup>33</sup>。

なお、これらの韻文の技巧は、荻原 (2013: 378) で扱った、同じく古代期トカラ語 B による Kz-213-ZS-Z-10 や次節で扱う Kz-213-ZS-L-09 にも見られるが、ここでは Kz-213-ZS-Z-10 及び古典期トカラ語 B で書かれた Kz-203-ZS-L-01 について確認する<sup>34</sup>。

### Kz-213-ZS-Z-10

4×14 = 7/7 (4-3-4-3)

pañcamn(e) ||

(p)r(a)kr(e) t(a)n(e) ; e)ñkältse | empäkwate ; ma prakre |  
ñäskemane ; eñkäl kwri | ritalyñeše ; läkle ste |  
kälpomeno ; tw ompostām | pašalyñeše ; läkle ste |  
tusa mā = ykne<sup>35</sup> ; kreñcepi | eñkäl yamttsi ; wacene || //1//

### 和訳

この世において、堅固で執着にとらわれている者も、(実際には)不確実であり、堅固ではない。執着を追い求めれば、渴望することによる苦しみがある。手に入れた後には、守り続ける苦しみがある。そのため、善人にとって、(自らが)とらわれているものを優先しないことは義務ではない(= 自然なことである)。

### Kz-203-ZS-L-01

|| arai sruka || kantsakaršanne ||  
arai srukalyñe | cisa nta kca ; mā prāskau |  
pontas srukelle | kā ñiš šeske ; tañ prāskau |  
sām rai ñi palsko | cisa prāskau ; pot prekenne |  
twe ñke kalatarñ | apiš wārñai ; nreyntane || //1//

<sup>33</sup> Malzahn (2012b: 158) の統計では九割以上がこの位置に置かれているが、本稿で扱った題記では八割以上がこの位置に置かれている。なお、clitic については、次節で扱う Kz-213-ZS-L-09 の *spä* も同様の位置に置かれている。

<sup>34</sup> この二つの題記の転写は既に公表しているため、ここでは音素転写によって引用する。また、その後の検討の結果、Kz-213-ZS-Z-10 の解釈及び翻訳に誤りがあったため、以下の和訳に差し替える。

なお、Kz-203-ZS-L-01 は TochSprR(B) II: 189 で、ドイツ探検隊による写真に基づいて Nr. 298 として転写が公表されており、それ以降当該題記の韻律は 12/12/13/13 とされていたが、新疆龜茲研究院・北京大学中国古代史研究中心・中国人民大学国学院西域歴史語言研究所 (2013: 350) で公表した現地調査に基づく解説によって、12/12/13/12 であることが明らかになった。ただし、この韻律については、荻原 (2012: 114) で言及したように、対応するトカラ語 A の同名の韻律から、本来は 4×12 = 5/7 (5-4-3) であった可能性が指摘され、この推定が正しいならば、pāda c のみが一音節多いこととなるが、Peyrot (2018: 327-328) はトカラ語 A とトカラ語 B で同一の韻律名が使用されていたとしても、異なる音節数によって形成される韻文が存在する点を指摘すると共に、この韻律名によって形成される韻文は pāda a/b/d が 12 音節で、pāda c のみが異なる音節数から形成される可能性を指摘している。また、この題記のアクセントの配列パターンについては、Adams (2003: 6-7) が分析を行っている。

<sup>35</sup> 前掲拙稿では当該箇所を mā ‘not’ + yakne ‘way’ の sandhi と見做したが、ここでは mā ‘not’ + aikne ‘duty’ の sandhi と解釈した。なお、この二つの sandhi の結果は同一のものとなる。

## 和訳

ああ、死よ。私はあなたを全く恐れてはいない。全ての者は死ぬ運命にある。どうして、私だけがあなたを恐れようか。敵よ、しかしこれが私の思いだ。私は如何なる時もあなたを恐れている。あなたは(きっと)、阿鼻地獄などの地獄へと私を連れて行くだろう。

## 4. 荻原 (2013) に対する修正

本稿導入部で述べたように、古代期トカラ語 B で書かれた題記について、荻原 (2013) では現地調査によって解読した結果を紹介した。その後、本稿で利用したドイツ探検隊による写真を利用することで、上記拙稿での解読を改善することができたため、本節では拙稿 (op.cit.: 380) で扱った、キジル石窟第 213 窟左側壁に書かれた二つの題記の修正を行う<sup>36</sup>。

## 4-1. Kz-213-ZS-L-03

本題記は韻文ではなく、当該石窟を訪れた者によって、その記念として書かれたものであることが内容から明らかである。この種の題記は、クチャ地域に見られるトカラ語 B 題記の中でも多くの割合を占めている。

## Transliteration

*ānatarakṣate*<sup>[1]</sup> *tane śemo te ṣotri peka*<sup>[2]</sup>

## Transcription

*ānatarakṣ(i)te*<sup>[1]</sup> *tane śemo te ṣotri p(ai)ka*<sup>[2]</sup>

## 注釈

- (1) <kṣa>の上には付加母音は見られないが、トカラ語 B の人名として<sup>0</sup>-*rakṣite* は良く知られているため、ここでは<kṣi>の書き誤りと見られる。また、前分の *ānata* は Skt. *ānanda*-のトカラ語 B の形式と考えられる。
- (2) その他の同様の題記から、この形式は *pik-* ‘to write’ の過去形三人称単数能動態の形式 *paika* と解釈されるため、この<pe>は<pai>の書き誤りと見られる。

## 和訳

*Ānandarakṣite* がここに来た。彼はその記しを書いた。

## 4-2. Kz-213-ZS-L-09

本題記は冒頭部分を欠いているが、*punctuation* が使用されていることから、韻文で書かれていると考えられる。また、前後に欠落部分があり、韻律を確定できないが、この韻文は書き終えないままに残されたものと見られる。

## Transliteration

/// [s]k[añ]e sportimar\ aka[ka[s]e spertene<sup>[1]</sup> : ma ṣpā p[ś]imar\ śle [ś]au\ kre - tṣ\ y[k]enta no [l]k[a]tsi {-} - - - - le oko śamñe came[l]\ -<sup>[3]</sup> [c](·)e mar\ [ʒ] - [i] [e se] [e] - -

## Transcription

<sup>36</sup> 拙稿にはその他にも修正すべき部分があるが、それらは最終報告書に譲り、本稿では扱わない。

/// škañe sportimar akalkaše spertene<sup>[1]</sup> : ma spē pšimar<sup>[2]</sup> šle šaul kre(nta)ts  
ykenta no lkatsi {-} - - - - (š)le oko šamñe camel(ne)<sup>[3]</sup> c(m)emar [ɜ] -  
i ·e se ·e - \_<sup>[4]</sup>

## 注釈

- (1) Toch.B *sperte* は、Adams (2013a: 788) に見える *spertte* ‘function, behavior (?)’ と解釈される。
- (2) 初出ではあるが、語根 *pāk* ‘to ripen’ の願望法一人称単数中動態の形式と解釈される。また、この語は、先行する *sportimar* と音韻・語義の面で対句の関係にあると見られる<sup>37</sup>。
- (3) 前後の文脈から *camel* ‘birth’ の処格 *camelne* が推定されることから、欠落部分には <ne> が復元される。ただし、ここでは語幹に *virāma* が附されており、一般的な正書法には従っていないが、このような例は古代期トカラ語 B の写本断片に散見される<sup>38</sup>。
- (4) 本題記の末尾の *akšara* は <la> のようにも見えるが、この読みを確定することはできない。

## 和訳

[...] 私は(自らの)願いの働きの下 [...] 時を過ごしていた。善人達の場所を見るために、私が再生することがないように。[...] 報いとして、私は人の世に(= 人として)生まれるだろう。 [...]

## 5. 古代期トカラ語 B 題記が提示する問題

本稿で解釈を行った、クチャのキジル石窟第 211 窟及び第 213 窟に書かれた古代期トカラ語 B による韻文題記は、基本的には荻原 (2013) で紹介したものと同様に、古代期トカラ語 B の言語特徴を明確に示していたが、古典期や後期のトカラ語 B の特徴も示す一方、ブラーフミー文字には古代期の特徴は一部の *akšara* に留まり、トカラ語 B の書写に使用される最古層のブラーフミー文字の特徴は皆無であった。尤も、表面の状態がそれ程良好とは言えず、また炭によって書かれた文字を、紙写本の書写に使用される文字と直接比較することは控えるべきであるが、母音 <a><ā><ā> とアクセントが相関しないという、古代期トカラ語 B に最も特徴的なものとされる言語特徴を示すこれらの題記が、最古層のブラーフミー文字で書かれていない点は注意されるべきである<sup>39</sup>。

Peyrot (2014) は、最古層のブラーフミー文字で書かれたトカラ語 B 断片が反映する言語特徴が、それ以降の *common archaic* と称されるブラーフミー文字によって書写された、その他の古代期トカラ語 B の資料と大きく異なっていないため、古代期トカラ語 B の写本断片の大部分が後代に書写されたものであり、古典期トカラ語 B と同時代に成立した可能

<sup>37</sup> 両者は一人称単数中動態の *-imar* という語尾を共有しているが、前者は未完了過去の形式であるのに対し、後者は願望法となっている。

<sup>38</sup> ここでは *camel* の処格が *camelne* となっているが、通常在証される形式は *cmelne* である。これは最初に斜格形 *camel* を *virāma* 付きで記した後に処格語尾 *-ne* を追加したためと考えられ、この推定が正しいならば、この部分は *cmelne* の書き誤りとなる。

<sup>39</sup> Peyrot (2008: 33-41) は、古典期トカラ語 B に見られる、アクセントの有無から生じる音素 /a/ 及び /a/ に対する母音 <a><ā>・<ā><ā> の書き分けが古代期トカラ語 B には見られない点を指摘する。本稿で扱った題記にも、古代期トカラ語 B のこのような特徴が指摘される。なお、Peyrot (2014: 132) で指摘される古代期トカラ語 B の三つの重要な言語特徴は、これらの題記にも在証される。

性が高いと指摘する<sup>40</sup>。しかしながら、本稿で解釈した古代期トカラ語 B による題記は、それらが暗誦されたものを壁面に書いたものでない限り、題記を書いた者の特徴を言語面及び文字使用の両面で反映していると見られる。従って、古代期トカラ語 B の言語特徴を反映する写本断片と古代期トカラ語 B 題記に見られる言語特徴・文字特徴は、統一的に解釈されるべき問題であり、文字特徴との比較から、これらの写本断片を単純に後代に書写されたものと見做すべきではなく、古代期トカラ B として想定される言語体系が、当時ブラーフミー文字によって書写される際、厳密な正書法によって規定され、現代の言語学者が期待するような理想的な文字使用が為されていたか否かが問題として設定されるべきである<sup>41</sup>。ただし、この問題の解決には文献学的により精緻な研究が必要であり、筆者にはこの点に関してまだ十分な準備がないため、ここで筆者の考えを提示することは控えたい<sup>42</sup>。

## 6. 結論

本稿では、クチャのキジル石窟第 211 窟及び第 213 窟に書かれた古代期トカラ語 B による韻文題記の解釈を行った。これらの題記は、荻原 (2013) で扱った古代期トカラ語 B による題記と同様に、文字特徴と言語特徴との相関関係に関する従来の説の再検討をせまるものであった。また、韻文の技巧については、古典期トカラ語 B に見られる、特定の語形・音素の繰り返しや特定の位置に配置される clitic の使用といった技巧が、これらの題記にも反映されていた。ここで行った解読作業により一定の長さを有する韻文のコーパスを回収できたことで、古典期や後期のトカラ語 B とは異なり、状態の悪い断片が殆どを占める古代期トカラ語 B に対して重要な資料を提供することができた。今後、古代期トカラ語 B の体系的な研究を通して、本稿で指摘した問題の解決に当たりたい。

## 参考文献

- Adams, Douglas Q. (2003) Patterns of stress and rhythm in Tocharian B prosody. In: Brigitte L. M. Bauer and Georges-Jean Pinault (eds.) *Language in time and space. A festschrift for Werner Winter on the occasion of his 80th birthday*. Berlin-New York: de Gruyter, 1-12.

<sup>40</sup> Peyrot (2014) は、トカラ語 B の書写に使用されるブラーフミー文字の字形の変化が、トカラ語 B の言語特徴の変化より進んでいた点を指摘している。

<sup>41</sup> 例えば、音素/a/及び/a/はアクセントを伴った時には<a>及び<a>と書かれ、アクセントを伴わない場合には<a>及び<a>と書写されるが、古代期のブラーフミー文字で古代期トカラ語 B を書写していた当時、このような文字と音韻の相関関係が、果たしてブラーフミー文字の知識を有する者に理解・共有されていたか否か、換言すれば、正書法として成立していたか否かが問題となる。これはインドに由来するブラーフミー文字を利用して、サンスクリットとは全く異なる音韻体系を有するトカラ語 B を表記した最初期の段階では必然的に生じる問題であり、ブラーフミー文字という表音文字の背後に存在する古代期トカラ語 B の実体を、どのように把握するかという問題にも直結する。なお、トカラ語と同様に、ブラーフミー文字を利用して自らの言語を表記したコータン語の場合については、熊本 (1998) を参照。ただし、現在知られている古代期トカラ語 B による断片に、後代のコピーが混入している可能性を筆者は否定しない。

<sup>42</sup> 筆者は、荻原 (2014, 2015) において、古代期トカラ語 B の言語特徴を反映する断片を扱ったが、これらの断片は古代期トカラ語 B の言語特徴を示す一方、文字の字形には最古層のトカラ語 B のブラーフミー文字の特徴が見られなかった。そのため、言語特徴・文字特徴から、筆者はこれらの断片が後代に書写されたものと見做したが、このような見方はここで指摘した観点からの再検討を要する。



- Adams, Douglas Q. (2013a) *A Dictionary of Tocharian B, revised and greatly enlarged*. Amsterdam: Rodopi.
- Adams, Douglas Q. (2013b) More thoughts on Tocharian B prosody. *Tocharian and Indo-European Studies* 14: 3-30.
- BHSD = Edgerton, Franklin (1953) *Buddhist Hybrid Sanskrit grammar and dictionary. Vol. II: Dictionary*. New Haven: Yale University Press.
- Bross, Christoph, Dieter Gunkel, and Kevin M. Ryan (2014) Caesurae, bridges, and the colometry of four Tocharian B meters. *Indo-European linguistics* 2-1: 1-23.
- Kosta, Peter (1988) Zur Bedeutung der unterschiedlichen Schreibung der Vokale a/ā, u/ū, i/ī im Auslaut der toch. B-Wörter (an Hand der MQ- und MQR-Texte). In Peter Kosta, Gabriele Lerch, Peter Olivier and Werner Thomas (eds.), *Studia Indogermanica et Slavica. Festgabe für Werner Thomas*. München: Otto Sagner, 153-173.
- 熊本裕 (1998) 「『表音文字』の背後にあるもの—中央アジア・ブラーフミー文字の場合」『東京大学言語学論集』 17: 221-229.
- Malzahn, Melanie (2007) The most archaic manuscripts of Tocharian B and the varieties of the Tocharian B language. In: Melanie Malzahn (ed.) *Instrumenta tocharica*. Heidelberg: Winter, 255-297.
- Malzahn, Melanie (2012a) Now you see it, now you don't—Bewegliches -o in Tocharisch B. In Olav Hackstein and Ronald I. Kim (eds.) *Linguistic developments along the Silk Road: Archaism and innovation in Tocharian*. Wien: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften, 33-82.
- Malzahn, Melanie (2012b) Position matters: The placement of clitics in metrical texts of Tocharian B. *Tocharian and Indo-European Studies* 13: 153-162.
- Malzahn, Melanie (2018) Lautliche Aspekte tocharischer Dichtersprache. In: Olav Hackstein and Dieter Gunkel (eds.) *Language and meter*. Leiden: Brill, 205-221.
- Maue, Dieter (2009) *Corpus of Tumshuqese Fragments*. TITUS (Thesaurus Indogermanischer Text- und Sprachmaterialien), see <http://titus.uni-frankfurt.de/indexe.htm>.
- Maue, Dieter (2016) Tumschukische Miszellen IV / Miscellanea Tumšucica IV. *Tocharian and Indo-European Studies* 17: 109-132.
- 荻原裕敏 (2012) 「トカラ語 B の『Avadāna 写本』断片について」『東京大学言語学論集』 32: 109-243.
- 荻原裕敏 (2013) 「略論亀茲石窟現存古代期亀茲語題記」『敦煌吐魯番研究』第十三卷: 371-386.
- 荻原裕敏 (2014) 「トカラ語 B の『出家功德経』写本」断片について」『東京大学言語学論集』 35: 233-261.
- 荻原裕敏 (2015) 「ドイツ所蔵トカラ語 B 断片 THT1859-1860 について」『東京大学言語学論集』 36: 103-129.

- Peyrot, Michaël (2008) *Variation and change in Tocharian B*. Amsterdam: Rodopi.
- Peyrot, Michaël (2014) La relation entre la chronologie du tokharien B et la paléographie. In: Nalini Balbir and Maria Szuppe (eds.) *Eurasian Studies XII* (2014). 121-147.
- Peyrot, Michaël (2018) A comparison of the Tocharian A and B metrical traditions. In: Olav Hackstein and Dieter Gunkel (eds.) *Language and meter*. Leiden: Brill, 205-221.
- Pinault, Georges-Jean (1987) Épigraphie koutchéenne, I. Laissez-passer de caravanes, II. Graffites et inscriptions. In: Chao Huashan, Simone Gaulier, Monique Maillard and Georges-Jean Pinault (eds.) *Sites divers de la région de Koutcha*. Paris: Collège de France, 59-196.
- Pinault, Georges-Jean (2008) *Chrestomathie tokharienne: Textes et grammaire*. Leuven-Paris: Peeters.
- 荣新江 (2015) 「近年对龟兹石窟题记的调查与相关研究」『西域研究』2015 年第 3 期: 1-9.
- Skjærvø, P. O. (2003) *Khotanese manuscripts from Chinese Turkestan in the British Library: A complete catalogue with texts and translations* [Reprinted with corrections]. London: British Library.
- Tamai Tatsushi (2011) *Paläographische Untersuchungen zum B-Tocharischen*. Innsbruck: Institut für Sprachen und Literaturen der Universität Innsbruck.
- TEB I = Krause, Wolfgang and Werner Thomas (1960) *Tocharisches Elementarbuch. Band I. Grammatik*. Heidelberg: Winter.
- TochSprR(B) II = Sieg, Emil and Wilhelm Siegling (1953) *Tocharische Sprachreste. Sprache B. Heft 2. Fragment Nr. 71–633. Aus dem Nachlass hrsg. von Werner Thomas*. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht.
- Winter, Werner (1957) Tocharische Metrik (1957). *Tocharian and Indo-European Studies* 16 (2015): 199-209.
- Winter, Werner (1959) Zur „tocharische“ Metrik. *Akten des XXIV. Internationalen Orientalistenkongress München 1957*, 520-521 = In: Olav Hackstein (ed.) *Kleine Schriften. Selected writings, in zwei Bänden. Festgabe aus Anlass des 80. Geburtstags*. Bremen: Hempen, 2005, 26-27.
- 新疆龟兹石窟研究所 (2000) 『克孜尔石窟内容总录』乌鲁木齐: 新疆美術摄影出版社.
- 新疆龟兹研究院・北京大学中国古代史研究中心・中国人民大学国学院西域历史语言研究所 (2013) 「克孜尔石窟后山区现存龟兹语及其他婆罗谜文字题记内容简报(一)——第 203、219、221、222、224、227、228、229 窟一」『敦煌吐鲁番研究』第十三卷: 341-369.
- Zimmer, Stefan (1997) Tocharische Sprachkunst. *Tocharian and Indo-European Studies* 7: 213-226.

# Verse Inscriptions Written in Archaic Tocharian B

Ogihara Hirotoši

Keywords: Archaic Tocharian B, Kizil Grottoes, Brāhmī script

## Abstract

This paper presents interpretations of some verse inscriptions that exhibit linguistic features of the Archaic Tocharian B language. Thus far unknown to the scholarly world, these inscriptions have been studied by the author as one of the most critical tasks in the research project directed by Xinjiang Kucha Research Academy, Center for Research on Ancient Chinese History, Peking University and Institute for Historical and Philological Studies of China's Western Regions, School of Chinese Classics, Renmin University of China. Although they are more or less damaged, the inscriptions are located in Caves No. 211 and No. 213 in the Kizil Grottoes, and they were interpreted based on the author's own *in situ* decipherment and old photographs taken by the German and French Expeditions.

Although all of these inscriptions clearly exhibit linguistic features of Archaic Tocharian B, the Brāhmī script in which they were written cannot be classified to the most archaic form used for writing Tocharian B. This leads us to reconsider the correlation between the historical status of Archaic Tocharian B and the classification of the Brāhmī script used for Tocharian B.

(おぎはら・ひろとし 京都大学白眉センター/文学研究科)